

尾瀬入山10万人最低

昨年自粛・コロナ対応影響

21.3.16朝日群馬版

群馬や福島など4県にまたがる尾瀬の2020年の入山者数が約10万7千人だった。1989年の調査開始以来最低。環境省関東地方環境事務所が調査でわかった。コロナ禍で入山自粛が続く、山小屋も感染防止策の準備で営業開始が遅れたことが響いた。

尾瀬では昨年、夏山シーズンを迎えても、尾瀬保護



コロナ禍により鳩待峠口に置かれた入山自粛を求める看板(左) 2020年6月

財団や環境省から入山自粛が強く求められた。群馬県側は、ミズバショウの見頃が過ぎた5月下旬から、福島県側は7月から入山が可能になった。山小屋や休憩所の営業開始は7月1日以降と遅れ、営業そのものを見送った施設もあった。

主な入山口に設置した赤外線カウンターの、5、10月に入山した数を調べている。調査を始めた89年以降で96年の約65万人が最多だったが、レジャーの多様化などで減少傾向が続く、19年は約25万人と最低を更新。コロナ禍の昨年はその半数以下になった。

昨年の入山者数は10万6922人。月別では、入山自粛の中で群馬県の鳩待峠口と大清水口しか入れなかった5、6月がそれぞれ1270人、4454人と激減。ニッコウキスゲなどの湿原植物が見頃で年間の中

でも多くの人が訪れる7月も1万6748人ととどまった。8月の3万6401人が最も多く、9、10月はいずれも2万人を超えた。入山口別では鳩待峠口(尾瀬ヶ原方面)が全体の53%を占め、利用者の集中は変わらなかった。

尾瀬山小屋組合の清水秀

「組合長は「入山者数が少ないのは仕方がない。感染対策により尾瀬からコロナを出さなかったのはとっとうれしい」。環境省の担当者には「入山者の数だけでなく、満足度の高さを目標としてリピーターやファンを増やせば」と話した。

(張育明)